

紹介

中尾芳治・栄原永遠男編

『難波宮と都城制』

昭和二十九年（一九五四）に山根徳太郎により開始された難波宮発掘調査は、昨年で六十年を迎えた。本書はこれまで蓄積されてきた膨大な研究を総括し、各分野の成果・問題点を示した書として、六十年に亘る難波宮研究史における記念碑的著作と呼ぶべきものである。総勢十八名の研究者により編まれ、大きく三部に分けて各論が展開される。以下各部に分けて論旨を簡潔に紹介する。

「第Ⅰ部 難波宮の調査と研究」では、山根氏の生い立ちと発掘・研究経緯を振り返る直木孝次郎「山根徳太郎の難波宮研究」を筆頭に、主に考古学的見地に立った諸論で構成される。松尾信裕は「古代難波の地形環境と難波津」と題し、先史からの地理的環境復原諸説を総括して中世までの変遷を描き、難波地域の特殊性を考える根本的視点を提供する。南秀雄「難波宮下層

遺跡をめぐる諸問題」は、難波宮造営以前の法円坂倉庫群など五世紀以降の遺構群を扱い、宮地として選定される以前の都市的様相を考察する。高橋工「前期・後期難波宮跡の発掘成果」は、発掘調査から得られた難波宮中樞部の構造を概観した上で、依然具体的様相の判然としない周辺部の構造について最新成果を紹介しつつ検討を加える。佐藤隆「難波地域の土器編年からみた難波宮の造営年代」は、土器編年研究の概要と代表的資料を紹介した上で、文献史料との整合性に問題提起をしている。植木久「難波宮の建築」は、難波宮遺構の数値的理解を通して宮の精密な建築・配置計画に迫り、我が国の大陸建築受容過程を考察する。八木久栄・宮本佐知子「後期難波宮の屋瓦と大阪府下出土の同範瓦」は、宮跡外で出土した同範瓦の事例を突き合わせ、後期難波宮の影響圏を考察する。栄原永遠男「難波宮跡北西部出土木簡再考」は、宮西北部で出土した木簡群、特に荷札木簡を取り上げて検討を加える。横山洋「難波京の復原と難波大道」は、難波宮を中心とする周辺地域の方格（条坊）地割施工の状況について、発掘成果に基づいて検討する。

「第Ⅱ部 難波宮をめぐる政治と文化」は、主に都城制・文化土壌の視点から難波を論じる。田中清美「古代難波地域の渡来人」は、文献と韓式系土器などを総合して五・六世紀の渡来人の動向に関する見解を示す。中尾芳治「難波宮から藤原宮へ」は、七世紀京都の系譜における前期難波宮の位置づけ、設計・造営に窺える王権の意図を考察する。小笠原好彦「難波宮・京と複都制」は、唐の複都制を踏まえ、難波宮・恭仁京の性格を論ずる日唐複都制比較論である。國下多美樹「長岡京遷都と後期難波宮の移建」は、後期難波宮と長岡宮の中樞施設の比較により移建の実相に検討を加える。榎村寛之「古代都市難波の『神まつり』環境」は、古代難波の祭祀環境と抱かれたイメージに焦点を当て、思想・宗教的見地から難波を論じる。古市晃「難波と仏教」は、仏教導入期における難波の環境と蘇我氏の関わりを積極的に評価する論考となっている。

「第Ⅲ部 難波宮と東アジアの都城制」では、東アジアの一宮都という難波宮の性格をクローズアップする。村元健一「中国宮城の変遷と難波宮」は、中国都城の系譜

を踏まえ前期難波宮への具体的な影響を考察する。李陽浩「古代東アジアにおける八角形建物とその平面形態」は、依然定説を見ない前期難波宮八角殿の性格を、東アジアの類例を挙げて再検討している。

以上、考古・文献・建築・思想など、古代難波宮研究に関わる諸分野について、現状での到達点を簡潔に示したことが本書の功績であろう。巻末に調査・保存略年表や関連調査報告書・主要図書一覧など、豊富な関連情報を掲げる点も有益である。単一分野の視点のみから難波宮の全容に迫ることの限界は自明であり、横断的・学際的視点が今後一層求められることは間違いない。本書は難波宮研究に携わる者に限らず、広範な人々に資する内容であり、今後の難波宮研究において常に参照すべき一冊といえる。

(A5判 三六八頁 二〇一四年八月
吉川弘文館 税別二二〇〇円)
(寺井康矩 京都大学大学院文学研究科修士課程)

Glenn Dynner,

Yanbel's Tavern:

*Jews, Liquor, and Life in the Kingdom
of Poland*

アダム・ミツキエヴィチといえばポーランド・ロマン主義を代表する詩人であるが、その彼が亡命先のパリで執筆した作品『パン・タデウシユ』をご存じだろうか。舞台は一九世紀初頭のリトアニア。ナポレオンの東方進軍によって待望の故国復活なるかという熱気のなか、主人公であるタデウシユとその周囲の人物たちが織りなした社交、陰謀、対立、和解の物語である。

その作中、中心的というわけではないけれども、個性的かつ魅力的な人物として、ヤンキエルというユダヤ人の居酒屋店主が登場する。彼の店は地元のシユラフタ、農奴、司祭らがやってきては大いに酒を飲む社交の場であった。ひとり店主ヤンキエルだけが素面を保って店内を見張り、ときに楽器を手にして客をもっと楽しませる（飲ませる）のである。かつてかの地でこうした情景はありふれたものだった。分割はそ

の日常を変容させたのだが、あの伝統的な世界は一体いつまで存続したのだろうか。

ここに紹介するグレン・ディンネルの近著『ヤンキエルの居酒屋』は、ポーランド王国（ロシアに分割された領域のうち、今日のウクライナ、リトアニア、ベラルーシを除いた地域）を対象にこの問いに答えるものである。以下ではその要点を二つにまとめる。

一点目は、史料読解に依拠する実証主義批判である。従来説では、分割後の国家によるユダヤ人居酒屋の規制（例えば、許可制の導入、店舗の主要街道からの隔離）が、その衰退をもたらしたとされてきた。だがこの学説は、取り締まる公権力にとつて都合の良い事実のみを述べる史料の性質を看過している。

近世以来、ユダヤ人はシユラフタから居酒屋を貸付され、そこから生まれる利益は所領の主な収入源をなした。そしてそのような経済構造のもとでは、居酒屋を成功させるには常に素面を保つユダヤ人こそが最適であるという観念が形成された。上述のヤンキエルは、詩人自身がなじんでいた当時のユダヤ人イメージの表象であったのだ。